

生き物を飼うとは殺すということ

第1組雲端寺 藤井 玲奈

うちではメダカ、ドジョウ、タニシやエビなどの水の生き物を飼っています。

ほとんどが近所の用水路で捕まえたもので、連れて帰って家の^{すいれんぼち}睡蓮鉢や水槽に放すのです。こうした生き物は金魚や熱帯魚のような派手さはありませんが、何とも言えないおもしろさがあります。メダカが^{こぜりあ}小競り合いしているところや、エビがタニシの殻に乗って大きさを測るような動きをしていたり、水槽の底でドジョウが砂から顔だけ出してぽかんとしたりしている姿など、時を忘れて見入ってしまいます。

こうして日々楽しませてくれる彼らですが、飼っているうちに死んでしまうことも多く、これまでどれだけの魚を死なせたかしれません。水が悪くなっていたのだろうか、えさが多かったかなどと数日の行動を思い返し、なにかしてやれることがあったのではないかと毎回考えるのですが、最終的には、私が捕まえさせなければ、こんなふう^に死ぬことはなかったのではないかという罪悪感にさいなまれるのです。

もちろん、用水路で生きていれば、敵に狙われる危険もあったでしょうし、農薬に毒されたかもしれず、野生のままがいちばんよかったとはいえないかもしれません。しかし、野生のものを捕獲して飼うということは彼らが長生きできる

とかできないとかそういうことではなく、広い世界に生きていたものをせまい入れ物に入れ、私がいなくては生きていけなくさせ、「自然な死」をむかえられなくさせたということなのです。

後悔して反省して、もう飼うのはやめよう、となるかと思えばそうはならず、いないことがさびしくてまた捕りに行き、持ち帰って水槽に放して眺めたりえさをやったりしてかわいがる。いずれ死んでしまう、いや、殺してしまうのだと思いながらやめられません。

ひとに飼われた生き物はかわいそうです。しかしいけないとわかっていながら飼うのをやめられない私は、そうした生き物のあわれさとは違った意味でかわいそうなのかもしれません。